

# 小中9年間を見通した、確かな学力を 育む授業の創造

～ICT機器の活用を活かして、児童がかかわり合うことを目指して～

かかわり合い

尾道市立日比崎小学校

〒722-0013  
広島県尾道市日比崎町12番1号

<http://www.onomichi.ed.jp/hibizski-e/>

## 1. 研究の背景

本校児童は、明るく、様々なことにチャレンジしようとする積極的な姿勢が見られる児童が多い。反面、自分の考えをしっかりともち、その上で相手の考えを受け止めて、その考えに対する自分の考えを的確に伝えるというコミュニケーション能力は十分に育っているとは言えない。そこで、これまでに積み上げてきたコミュニケーション能力を基盤として、授業中でのコミュニケーション活動を充実させることによって学力の向上を目指した取組を進めてきた。

本年度は、広島県小学校視聴覚教育研究大会を受け、児童がかかわり合う学習の中で ICT 機器を効果的に活用する場面とその期待できる学習効果を考え、授業改善に取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

前述の児童の実態から、本年度も外国語活動と算数科に重点を置き、外国語活動においては、かかわり合う力や意欲をさらに高め、算数科においては、自分の考えをもち、お互いの考えを交流して練り合う中で、目標とする学力を身に付けさせていきたいと考えた。これにより、本校の学校教育目標「夢や目標をもち 互いに響き合う子どもの育成」の具現化につなげる。

そこで、外国語活動と算数科において、次のような研究仮説を立てて、取り組む。

外国語活動では、「外国語活動を通して、ICT 機器を効果的に活用しながら、言語への関心を高めていく活動を積み重ねれば、積極的に自分の身近なことについての情報や気持ちをやり取りするようになるであろう。」と考える。

算数科では、「問題解決的な学習をとおして、課題の把握や自力解決、集団思考の場で ICT 機器を効果的に活用し、児童が簡単な言葉や式、図や表などを活用しながら説明して練り合う力を高めれば、算数的思考力・表現力が高まるであろう。」と考える。

### 3. 研究の方法

研究仮説を検証するために、研究リーダーを置き、研究グループを形成して推進するとともに学年で連携を密にし、研究授業を行い、授業改善を進める。

- (1) 学力向上の成果について、ICT 機器の効果的な活用方法の工夫をした授業を通して明らかにしていく。

検証の指標として

<外国語活動>

- ① 外国語活動の振り返りにおいて、相手や場、目的意識をもってかかわり合おうとした児童の割合
- ② 児童への意識アンケートにおいて、意欲的にかかわり合おうとした児童の割合

<算数科>

- ① 学期末テストにおいて、3 観点（思・技・知）の合計の正答率
- ② 考えを書く評価問題において、簡単な言葉や式を用い、考えを筋道立てて表現した児童の割合
- ③ 児童への意識アンケートにおいて、肯定的に評価した児童の割合

到達目標として

<外国語活動>

- ① 全校児童の振り返りにおける肯定的評価の割合→85%以上
- ② 全校児童の意識調査における肯定的評価の割合→85%以上

<算数科>

- ① 学年末テストの正答率30%未満の児童の割合0→90%
- ② 評価問題の正答率80%の児童の割合→80%以上
- ③ 全校児童の意識調査における肯定的評価の割合→85%以上

- (2) 校区の中学校と連携し、小中9年間を見通した取組を研究する。  
(3) 市や県の研究部会と連携し、情報教育の先進的な取組を追求する。

### 4. 研究の内容・経過

#### (1) 授業実践

ア 第1学年 算数科「たしざん(1)」の取組

本時は、教育用プレゼンテーションソフトを活用し式から加法の場面を把握し問題づくりをさせる授業で、ICT 機器を導入時と問題把握、集団思考で活用した。導入時には、たし算の計算を復習させるために大型スクリーンにフラッシュ型教材を映し出した。式や答えを素早く提示することで、児童の意欲を高めることができ、全員がテレビ画面に映したフラッシュカードに集中して、たし算の復習ができた。(図1)

問題を分かりやすく把握させるために、教育用プレゼンテーションソフトを使い、集団思考の場面では、実物投影機を活用しワークシートを映しながら自分の考えを説明させた。

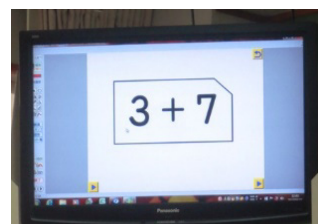


図1

課題解決の見通しがしっかりでき、お互いの考えを交流し練り合うことができた。ブロックを操作しての考えを視覚化することにより、共有化でき、深い学びへととなった。(図2)



図2

#### イ 第6学年 算数科「分数のわり算」の取組

本時では、(分数) ÷ (分数) の計算の仕方を考え理解する授業で、タブレットPCと電子黒板を集団思考の場面において有効活用した。タブレットPC学習システムを使って送った素材をもとに、自分の考えを書き、電子黒板に一人一人の考えを集約した。

その中で、児童に練り合わせたい考えを再度タブレットPCに送り考えを共有させ、グループで図や式からどんな解き方をしているのか考えさせた。指導者が、一人一人の考えを確認し、比べて、練り合わせたい考えを取り出すことができた。また、考えを共有させることで、児童一人一人がグループで主体的に意見を出し、考えを深めさせることができた。集団思考においては、言語活動を駆使して、グループでの考えをまとめ、分かりやすく説明し、表現力も培っていくことができた。(図3、図4、図5)



図3



図4

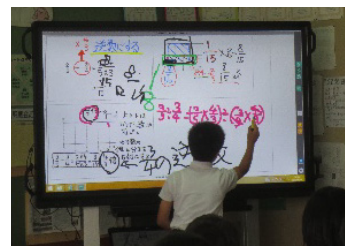


図5

#### ウ 第6学年 外国語活動「修学旅行で日本のよさを紹介しようI」

本校では、修学旅行の見学地である金閣寺を外国語活動の実践の場として捉え、外国の方に日本のよさを紹介するためにインタビューを行い、英語への慣れ親しみやコミュニケーション能力をつけようと考えている。また、中学校での英語の授業へスムーズに移行できるようにとも考えている。そこで、初対面の相手のことを考えた場に応じた態度でかかわれるようにするための授業の場面で、ビデオを大型スクリーンに映し出したり、デジタル教材や電子黒板、タブレットPCなどその場のねらいに応じてICT機器を積極的に活用したりした。

導入時には、昨年度の修学旅行でのインタビューの様子を大型スクリーンに映し出し、活動のゴールイメージを具体的にもたせ、よいかかわり方を把握することができた。また、よい場面を繰り返し見せたり、静止して確認したりすることができた。(図6)



図6

さまざまな国の外国の方に出会うことを想定して、デジタル教材を使用してさまざまな国のあいさつを聞き、ネイティブな発音を意識してきいたり、発話させたりすることができた。(図7)

言語活動時には、タブレットPCでかかわっている姿を録画し、それをグループで見ながら、よ

りよいかかわり方について話し合わせた。このことによって、自分がかかわっている姿を客観的に見て評価することができた。録画した画像を、すぐに見直し、グループ内でかかわり合いながら、よい点や改善点について協議することができた。

また、手本になるようなかかわりができているグループの活動の様子を全体に提示することで、よいかかわり方について全員が共有することができた。(図8, 9)



図7



図8



図9

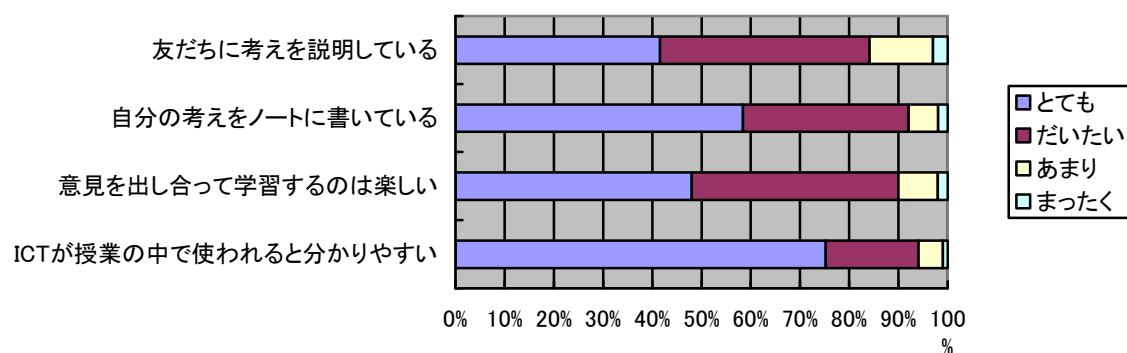
## (2) 授業実践交流を通して

年間一人1回以上の授業研究を行い、協議会では、ICT機器の活用場面と学習効果について協議し、共有化を図った。そして、本校のICT機器活用の手引きとして表にまとめ、視覚化を図り、教職員がおくすることなくICT機器を授業に取り入れられるようにした。

## 5. 研究の成果

児童の関心・意欲を高め、学習成果を上げるためには、どのようにICT機器を効果的に活用すればよいか考えて、授業に取り入れる教職員に変容していった。そして、板書とICT機器のバランスを考えながら、児童が主体的に深く学ぶための授業をコーディネートするようになってきた。

児童においても、ICT機器を積極的に授業に活用するようになって、授業が分かりやすく学習への意欲が増してきている。自分の考えをノートに書き、友だちへの説明を意欲的に行っている児童も増えてきた。



## 6. 今後の課題・展望

来年度は、児童の ICT が授業の中で使われると分かりやすいという意識調査の結果を基に、更に ICT 機器の環境整備を行い、今年度の取組を継続・深化させていく必要がある。授業でつけていく力を明確にして、「授業のどの場面でどのように ICT 機器を効果的に活用するか」を意識して、授業力の向上につないでいきたいと考える。それが、児童の学力の向上につながるということを意識して取り組んでいきたいと考える。

### < 参考文献 >

・文部科学省「教育の情報化に関する手引き」(平成 22 年 10 月)